

最優秀賞

『アメリカ教育使節団報告書』 村井実全訳解説

教養デザイン研究科 博士前期課程 2年 柳井孝太

あらゆる分野に「古典」と呼ばれる書物がある。単に古いというだけではない。長年にわたり読み継がれ、愛されてきた一握りの書物だけが、「古典」という名称を手に入れることができる。今日、私たちの身の回りには溢れるばかり書物がある。だが、50年、100年のち、一体何冊の本が読み継がれているのだろうか。長い年月の中で多くの本が陳腐化していく。そうした歳月の批判に耐えた本にこそ、私たちは普遍的価値を見出すことが出来るのではないだろうか。

今回紹介する『アメリカ教育使節団報告書』は、紛れもなく戦後日本教育の「古典」である。終戦直後に刊行され、既に70年以上の歳月が経過した。だが、その輝きは全く色あせることはない。1946年、日本の教育制度の抜本的改革を目的に、127名の使節団がアメリカから来日した。連合国最高司令部(GHQ)の要請に基づいてのことであった。教育者や教育行政官からなる使節団は、日本各地の教育施設を視察し、日本側の教育者とも懇談を行った。そうしてまとめられたのが、本報告書である。扱う内容は成人教育、教員養成、高等教育、教育行政、初等中等教育と非常に幅広い。単線型6・3・3制の学校体系、男女共学制、児童生徒による委員会活動や生徒会活動、教育委員会制度、国定教科書の廃止、社会科の導入などが提言された。今日の我々が聞けば当たり前に感じることばかりである。つまりそれは、本報告書の提案に基づいて改革が断行された証なのである。誤解のないようにしたいのが、何もアメリカ側の意見を鵜呑みにしたのではないということである。漢字や平仮名に代わってローマ字の導入も提言されていたが、遂に実現されなかった。報告書の内容に感銘を受けた日本の教育者たちが、取捨選択をしながら改革を進めたのである。

そして、今日に至ってもなお達成できていない提言も多い。それを端的に示すのが、あるべき授業の姿について述べた箇所である。

教師が教え、生徒がそれを聞き、聞いたことを単に繰り返すといった雰囲気は、生徒の成長を刺激する効果を欠いている。生徒が質問を出し、いろいろな資料を調べ、自分の考えを仲間に批判してもらいながら、理性の光の中で、可能な結果あるいは現実の結果に照らして解決の道を見出していくことができるのでなければ、創意も独創性も抑圧されてしまうのである。

今日風の言い方をすれば、「アクティブ・ラーニング」や「探求的学習」に相当する考え方である。空襲の焼け野原が広がる中で、非常に崇高な目標を掲げていたことが理解できるだろう。本報告書は原点であり、未だ到達できない理想なのである。この報告書の掲げる理想を綺麗ごととして片付けるか、少しでも理想に寄せていく努力を続けるべきか、試されている。報告書が刊行されてから71年、未だ色あせない提言の数々は、まさに「古典」にふさわしい。教師を志す人間はもちろん、学校教育を受けたすべての人に触れてほしい一冊である。